

Title	植民者のアイデンティティー : 植民地下インドにおける境界の維持
Author(s)	大杉, 高司
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 67-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

植民者のアイデンティティー

― 植民地下インドにおける境界の維持[

序

化を不可避的なものとした「植民地化した側=オキシデント」から 頼を寄せることはもはやできなくなってしまった。しかしそれとは 日、「オリエント」や「未開」といった概念に対してナイーヴな信 や「未開」の概念に疑問を投げかけようとする人類学者たちが、変 民地化された」社会の動態を分析することで従来の「オリエント」 るぎなき地位を保持しているかのようにみえる。そのことは、「植 対照的に「オキシデント」や「文明」といった概念は依然として揺 や「帝国主義的ノスタルジア」の一形態にすぎないと指摘された今 れ、「オリエント」や「未開」に対する知識や関心が「知的支配② 植民地行政と初期の人類学者たちの間の相互依存関係が暴露さ

> 響を与えたであろうことは疑うべくもない。しかし「植民地化した 済」「農業技術」「土地改革」などが「未開社会」の変化に重大な影 地化された側」を「伝統」の中に封じ込めてしまうことと同じくら 側」をこのような「制度」にのみ埋没させてしまうことは、「植民 とらえてしまいがちであることと無関係ではないだろう。「市場経 の「外圧」を論ずる際には、それを極めて抽象的で物質的なものと い公平さを欠いたものだといわざるを得ないであろう。 この点で、植民地状況下で働いていた力が政治経済的次元に還元

大杉

高司

り、独特の説得力をもって読むものの前に迫ってくる。しかしO

を信じて疑わなくなっていく植民者たちの姿は、私たちがフォス 割は大きい。精神分析学者たちの指摘した、自らの「魔術的全能性 できるものでないことにいち早く注目した精神分析学のはたした役

ターやオーウェルの描き出した植民地社会の中に見出すものであ

唯物論や心理学の還元主義に陥ることなく「オキシデント=植民地化した側」を対象化するためには、西洋文化が「未開」というフリエント」について論じたかに見えるE・サイードも、実はJ・クリフォードの言うように「近代文化がエキゾティックなものをアイリフォードの言うように「近代文化がエキゾティックなものをアイリフォードの言うように「近代文化がエキゾティックなものをアイデオロジカルに構成することを通じて自分自身を絶えず構成していたく、その複雑で弁証法的な作用を」見ることを私たちに促していたく、その複雑で弁証法的な作用を」見ることを私たちに促していたく、その複雑で弁証法的な作用を」見ることを私たちに促していたく、その複雑で弁証法的な作用を通じているという。

蘭領インドの植民者社会について論じたA・L・ストーラーは、植会の研究によってさらに補強されている。例えば仏領インドシナとこうした視点は、日常的に「他者」と対面していた植民地の白人社の関係においてのみ「自己」を確認しえるのだという

民者社会や植民者というカテゴリーがこれまで考えられていたよう に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限に所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限ということができるだろう。

一九世紀中葉から二〇世紀初頭までの英領インドのイギリス人たちを対象とする本小論は、こうした局面に注目しながら、彼らがどうに自己をイメージしていたかを簡単にスケッチすることを目的としている。それはまた、ごくわずかの英国人が三億人のインド人をしている。それはまた、ごくわずかの英国人が三億人のインド人を関連であったという議論や、「文化」的な境界の明示が功利的な計算の問題に還元できるとするような議論を支持するものではない。後の問題に還元できるとするような議論を支持するものではない。後の問題に還元できるとするような議論を支持するものではない。後の問題に還元できるとするような、「文化」のは見いたとなるように、「文化」は日常の実践活動を通じて「自然化」され、精神分析学者が論ずるのと同じような「深み」から個々人をつた。

九世紀の英領インドの「境界」の明確化

セスを助長した二つの要素「白人の責務」の観念と「中産階級の貴 が様々な領域で明確化されていった。本章ではまず、そうしたプロ 族主義」について概観し、次章で扱う問題の背景を提示することに 一九世紀の英領インドではイギリス人とインド人との間の「境界」

§「白人の責務 (White Man's Burden)」

ド人をヒンドゥー教からキリスト教へ改宗させようとする前者の立 世紀初頭の福音主義と功利主義の立場に求めることができる。イン 務」という言葉に結晶化させた彼らの精神の起源を、私たちは一九 であるという信念であった。一九世紀末にキプリングが「白人の青 彼らのインド植民地支配を支えていたのは自らが「文明の伝導者」 象でしかなかったのとは対照的に、一九世紀から二○世紀にかけて 八世紀までのイギリス人にとってインドが専ら商業的関心の対 る野蛮なものたち/汝が捕らえし忌々しげな/半ば悪魔で半ば のものたちに仕えるために-/重い馬具を身につけて、/脅え だし/彼の地で異郷生活を送らせしめるのだ。/捕らわれの身 子供の彼らに奉仕するために。 白人の責務をやり遂げよ。/汝らの育てし最良のものを送り (Rudyard Kipling)

場と、インドに法と正義をもたらし次代を担う現地人中産階級を育

で高めることができると信じていた点で両者は共通していた。(2) きるばかりでなく、本国ではその達成が阻まれている理想状態にま が、インドをイギリスをモデルとした社会へ「改革する」ことがで 成することをめざす後者の立場との間には強調点の違いがあった

きる。 洋での交友(一八五五)」の以下のような下りに垣間見ることがで に対してもっていった意味は、例えばw・D・アーノルドの小説「東 が賛美した「廉潔さ」や「勤勉さ」「禁欲の美徳」や「よい行い」 で興隆しつつあった中産階級が、宗教者や少数のラディカルな人々 始まりでもあった。F・ハッチンスはこの変化の背景として、本国 へと固着化させてしまったことをあげている。それが植民地インド への信仰を吸収していくにつれ、それらを自己充足的なモラリズム 一八三〇年代にその頂点をむかえるが、しかしそれは情熱の退潮の 改革主義の情熱はマコーレーによって英語教育などが導入された

れることか!(1) のがひどい苦難と見なされることで、どれだけそこから喜びが生ま のストイックな喜びを感じるものなんだ。確固とした義務というも 人間というものは、何か不愉快な義務をやってのけることである種 「わかるだろ、私はインドなど決して好きではないのだ。しかし

で不快な生活ができるからだった。主人公オークフィールドは熱心 けられるとすれば、それはインドが理想社会の建設という場を提供 してくれるからではなく、そこで本国では経験できないほどの苦痛 自己充足的で禁欲的なモラリズムの時代に人々がインドに引きつ 植民者のアイ

であった。 に」インドにやってきた彼をインド人から隔てるその証となるもの信から教い出すものではなく、「自分の精神世界を見つめ直すためなキリスト教徒であったが、彼にとってキリスト教はインド人を迷

るものとの境界が乗り越えがたいものとして認識されている。 との共同作業のもとインドを改革しようとする功利主義者の情熱が との共同作業のもとインドを改革しようとする功利主義者の情熱が との共同作業のもとインドを改革しようとする功利主義者の情熱が との共同作業のもとインドを改革しようとする功利主義者の情熱が とい上げたように「半ば悪魔で半ば子供の」インド人を前に「重い馬 は、中では、模範を示すものとそれを舞台の下で眺め た以下のような言葉では、模範を示すものとそれを舞台の下で眺め た以下のような言葉では、模範を示すものとそれを舞台の下で眺め た以下のような言葉では、模範を示すものとして認識されている。

「過剰性」を秘めた場であったということである。H・アーレントい。しかし注意しなければならないことは、植民地が常にある種の国の中産階級の理想を直接反映したものであったことは間違いならしさ」「禁欲主義」「行動主義」「犠牲的精神」etc ―― が、本このような作業を担った人々を内面から支えていた理想 ―― 「男

高い壁の奥に周到に隠されたり、公費で本国送還されたことなどを

§「中産階級の貴族主義」と本国文化の再生産⁽³⁾

の欲求のはけ口を提供する場であったと見なすことはできない。 下アーノドは、インドへの労働者階級の流入が厳しく制限・監視されたことや、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所のの欲求のはけ口を提供する場であったと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリートと見なされ、インドへの労働者階級の流入が厳しく制限・監視されたことや、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所のれたことや、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所のれたことや、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所のれたことや、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所のできないる。

されていた」ものであったことを示していると言えるだろう。 配者にふさわしい装いをすることが植民地状況という文脈で「要請 詳細に報告しているが、こうした事実は逆に、イギリス人たちが支

り無く「イギリス化」していった点にある。そしてそれは、インド らが本国の上流階級の文化をモデルとしてそれを模倣し、自らを限 はインドを一獲千金の場とみなした彼らの中に、インドで築き上げ れ、衣食住すべての面で「インド化」していたのとは対照的に、彼(3) たちが少なくともインドにいる限りでインド流の生活様式を取り入 族主義」をそうしたナバブたちから明確に隔てていたのは、ナバブ からである。一九世紀のインドのイギリス人たちの「中産階級の貴 た富をもとに本国で貴族の地位や議会での席を手に入れる者がいた る意味でインドはイギリス人を「貴族化」させる場であった。それ ス人コミュニティーを作りあげるものであった。 人やインド文化から自らを隔て、植民地インドに飛び地的なイギリ ところで一八世紀の商人冒険家(ナバブ)の時代においても、あ

背景を提示することにしたい。 テーションという場について簡単に触れることによって次章以下の の純粋培養」と呼びうるような作業である)に重要な役割を果たし インドにおける「イギリス文化」の再生産(それは「イギリス文化 を詳しく論ずることはできない。そこでここでは、一九世紀の英領 たイギリス人女性の問題と、再生産の作業が結晶化したヒル・ス 本論では具体的にどのような「イギリス文化」が再生産されたか

イギリス人女性が大量に流入し始めた時期について特定すること

毯や家具などの調度品から、衣服、食料に至るまであらゆるものを るのに見事に成功していたと結論することが」できたのだった。 見ると、住み慣れない…遠く離れた地で、特殊イギリス的生活を送 てを費やし、そして実際に「一九世紀のインドのイギリス人女性を 連れていくからである」と述べているが、そうしたミニチュア版の(%) 論じて「イギリス人が異国の地で融通が利き、すぐその環境に順応 地で素敵なイギリス家庭を作りあげる」ことにあったからである。 見なされることになる。それは、彼女たちの役割が「遠く離れた敵 民地社会に定着すると、反対に彼女たちは白人の威信の源泉とすら れまで女性の流入を抑制していたが、しかしいったん女性たちが植 済的圧迫がイギリス人の威信を損ないかねないといった主張が、そ ンドの厳しい環境は女性には耐え難いという説明や、結婚が生む経 はできないが、多くの論者がそれを一九世紀中頃に求めている。 してしまうのは、ただ彼らが自分と一緒に『イギリスそのもの』を 「イギリス」づくりに彼女たちはもてるエネルギーのほとんどすべ 一八四五年に、E・イーストレイクが植民地のイギリス人の特徴を

リス人」としての自意識形成に重要な役割を果たしていたといえる。 ある」と言わしめるほどの社交サークルを作り上げた彼女たちは、(%) 二〇世紀初頭に観察したモード・ダイバーに「イギリスが五時の紅 本国から輸入し、本国風の芝生や花を必死に育てたばかりでなく、 そうすることで「生活の文明的水準」を維持しイギリス人の「イギ 茶の国であるとするならば、インドはディナー(パーティ)の国で 女性たちが家庭や社交界を作りあげたとすれば、ヒル・ステーシ

思い出させるものであった。例えば次のようなリットン卿の言葉何よりもその気候の快適さにあったが、それは彼らに本国の気候を別心を引き始め、最終的にビルマとセイロンを含め四九箇所ものヒ関心を引き始め、最終的にビルマとセイロンを含め四九箇所ものヒ関心を引き始め、最終的にビルマとセイロンを含め四九箇所ものヒワ・ステーションが設営されていたヒナラヤの地シムラに徐々に建って「イギリス的環境」を作りあげるものだった。グルカ戦争(一八コンはインド人社会から物理的に隔離された場所に、より完全な形の出させるものであった。例えば次のようなリットン卿の言葉に、イギリス的環境」を作りあげるものだった。グルカ戦争(一八世)が建ている。

美しい英国の雨であり、すばらしい英国のぬかるみである。」している。…午後は雨がちで道はぬかるんでいるけれども、それは「(オータカムンド)を見た今、私はそれが地上の楽園だと確信

たが、そのことは次のような確信に満ちた言葉と反響している。育をはじめ、結婚、出産、埋葬などの主要な人生儀礼がとり行われス人らしさと結びつけられた。ヒル・ステーションでは、子弟の教くされたイギリス人の想像力によって、容易にイギリス人のイギリそして、自然環境としての「英国らしさ」は、異国生活を余儀な

いうよりも、文化的サンクチュエリと呼ぶにふさわしいものであっなものが再生・消費されたヒル・ステーションは、単なる避暑地となものが再生・消費されたヒル・ステーションは、単なる避暑地とことができる。」 ことができる。」 「ソナワールの気候は全くもって英国的である…ここでは、習慣、「ソナワールの気候は全くもって英国的である…ここでは、習慣、

アイデンティティーを確認しあうことになったのである。ョンという「心暖まる英国的環境」で再会することにより、文化的た。任地に散々になったイギリス人たちは年に一度ヒル・ステーシ

「白人の責務」の観念と「中産階級の貴族主義」は、イギリス人のあるべき姿を確定し、彼らの間に想像上の一体性を現出させた点で共通している。確かに両者の間には矛盾する点があったが、もしその矛盾が致命的なものと見えるとすれば、それは実際にはとらえその矛盾が致命的なものと見えるとすれば、それは実際にはとらえおそらく現実のなかでは両者は複雑に絡みあい、日常のさまざまなおそらく現実のなかでは両者は複雑に絡みあい、日常のさまざまなおそらく現実のなかでは両者は複雑に絡みあい、日常のさまざまなおそらく現実のなかでは両者は複雑に絡みあい、日常の場面でいたある具体的表現を確定し、彼らの間に想像上の一体性を現出させた点のあるべき姿を確定し、彼らの間に想像上の一体性を現出させた点のある、

4 境界維持の実践と差異の身体化

§スポーツ、肉体、モラル

かなる資質をもつべきかについて述べた次のような発言からも推察味や娯楽の次元に留まるものでなかったことは、植民地行政官がいざる重要な部分をなしていた。彼らのスポーツへの傾倒が単なる趣九世紀英領インドのイギリス人たちの日常生活のなかで欠くべからクリケットやサッカー、ポロやハンティングなどのスポーツは一クリケットやサッカー、ポロやハンティングなどのスポーツは一

できる。

(8) 「未開人の取扱いについては、すべての面で "サヒーブ (支配者)』「未開人の取扱いについては、すべての面で "サヒーブ (支配者)』

のようなマコーレーの言葉に裏返された形で表現されている。 関えばそのことは、ベンガル人の「弱々しさ」について言及した次 は道徳的優位性の問題とはほとんど直接的に結びつけられている。 は道徳的な問題であったのと同じように、イギリス人の肉体的強靱さ が開題であったのと同じように、イギリス人の肉体的強靱さ まれた諸観念 ―― 行為への信仰、禁欲主義、男らしさ ―― が特殊な まれた諸観念 ―― 行為への信仰にも似た態度は「白人の責務」に含

肉体と道徳の結びつきは、スポーツのルールがイギリス文化全体くしてきたような性質である。」(Sa)立心、正直さは、彼らの性格とおかれてきた状況がその形成を難しる。…(彼らの)手足は華奢で、動きには気力がない。…勇気、独

「ベンガル人の身体の作りは弱々しく、衰弱しているとすら言え

を貫く価値の縮図となっていると考えられることでさらに強化された。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になったロード・ハリた。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になったロード・ハリと述べたとき、それは逆に、クリケットの競技規則や作法を習得するなを熟知したイギリス人が支配者の位置に留まっていることの正当性を熟知したイギリス人が支配者の位置に留まっていることの正当たとが、インド人がもし「クリケットの競技規則や作法を習得するなるが、インド人がもし「クリケットの競技規則や作法を習得するなるが、インド人がもし「クリケットの殺」でボンベイ知事になったロード・ハリた。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になった日に強化された。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になったロード・ハリた。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になった日に強化された。「近代クリケットの父」では、「近代クリケットの人」では、「近代クリケットの父」で述されていると表演している。

によって「ブリティッシュ・ラジの化身(incarnation of British たって「ブリティッシュ・ラジの化身(incarnation of British も儀礼的な形で示すものであった。そしてそれは本国から王族が訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪問したときもで見せた。

多くのイギリス人たちに直ちに再生産された。「暗黒なる力を征服示されたこうしたモデルは「中産階級の貴族主義」の文脈のなかで的に勇気と廉恥の人)」の名を冠されている。しかも、王族によってり「スポーツの世界のバヤール(Bayard,フランスの英雄的兵士、比喩

Raj) 『であることを印象付け、一九一一年に帝国皇帝会合のため

に訪れたジョージ五世は、その時見せた優れたライフルさばきによ

ながら、インド各地のイギリス人たちにある種信仰の域にまで高めなの最も優れた方法であるという合理的な説明による正当化をうけされながら、そしてまたハンティングが任地の地勢や住民を知るたされながら、そしてまたハンティングが任地の地勢や住民を知るたは一種の道徳的義務でさえあり、それが「思索」より「行動」を、する」帝国主義的正義の担い手にとって、ハンティングをすることする」

られたものとしてとり行われていたのだった。

と同時に、それがなくては自らの「イギリス人らしさ」が確認でき 性質はまた、当初それが人喰いライオンや穀物を荒らす猪から「土 ポーツマンらしく獲物にチャンスを与えない "unsporting" で やレオパードを使って獲物を追い詰めている狩りをみて、それがス 対してもそれは同じであった。一九二一年に訪印したプリンス・オ を取り入れることに必死だったインド土着の貴族のハンティングに なものであると判断されたことにも表れている。イギリス人の作法 められなければならなかったことにも表れていた。皮肉なことに、 した動物保護やハンティングの資格制限、国立公園の設立などが進 着民」を守るという名目によって正当化されていたにもかかわらず、 "un-British" なやり方だと非難している。ハンティングの儀礼的 ブ・ウエールズ (後のエドワード八世) は、バローダの藩王がチーター ンド土着の猟師たちの狩りが「残酷」で「男らしくない」「卑劣」 「外界の暗黒なる力」は、イギリス人の想定した「敵」であったの 九世紀末以降濫獲のため獲物が減少すると、「土着民」の意に反 それが手続きを厳格に定められた文化的儀礼であったことは、イ

った。なくなるがゆえに、イギリス人にとってなくてはならないものであ

のうちに生活したイギリス人たちが実際に経験していたものだった ローニーを内面から突き動かした衝動こそ、英領インドという現実 狂いそう」になると感じた『ビルマの日々 (一九三四)』の主人公 わない現地人召使いにテニスをさばることを責められながらも、 強く拘束するものであった。もっとも、その場の秩序に拘束されて 価値は、意に反してでも象を撃たねばならないイギリス人自身をも ェルが、その経験に基づいて書いたエッセイ『象を撃つ(一九三 英領インド・ビルマで警察官として勤務した経歴のあるG・オーウ 関係した、アイデンティティー確認の場であったといえる。しかし、 分自身「日中に一度くらいは汗びっしりにならないと…不安で気が いるという意識は、その外に出て初めて認識されうるものであろう。 六)』で極めて生々しく描いたように、スポーツに集約化された諸(程) な領域では決してなく、支配人種たる彼らの自己イメージと密接に 人たちのスポーツは、それ自体が目的であるような中立的で周縁的 「テニスがイギリス人に課せられた神秘的儀式である」と信じて疑 ハンティングにもっとも明らかなように、英領インドのイギリス

性と「文化汚染」

§

はずである。

ばかりでなく、公式の方針に基づいてそれを奨励しさえもしていた東インド会社がインド人女性を情婦や妻とすることを認めていた

れた伝記ではそのことは一言もふれられることがなかった。 は、 大との結婚はいかなる理由によっても認められないものとされ、一人との結婚はいかなる理由によっても認められないものとされ、一人の結婚はいかなる理由によっても認められないものとされ、一年までの時に三人のユーラシアン(混血)をもうけたが、一八三五年にはインド本に関わるほどのスティグマとみなされるようになる。一八三五年にはインド本に関わるほどのスティグマとみなされるようになる。一八三五年にはインド本に関わるほどのスティグマとみなされるようになり、一八世紀までとは対照的に、一九世紀には両人種間の性的接触は徐れた伝記ではそのことは一言もふれられることがなかった。

のような合理的説明が何度も繰り返し唱えられている。 や情婦とすることに圧力が加えられたとき、公式的な理由とされたや情婦とすることに圧力が加えられたとき、公式的な理由とされたがかりがでは度々議論の舞台となったが、ビルマ政務長官ばかりかイクにとになるというものであった。一八五三年に併合されたばかりのような合理的説明が何度も繰り返し唱えられている。 のような合理的説明が何度も繰り返し唱えられている。

九世紀のイギリス人たちの主張を証拠だてる事実には乏しかった理的」態度が一九世紀になって表面化してきた結果であると見なす界を再定義しようとする全般的努力に伴う」ものであったのは間違いないであろう。しかしそのことを、支配を安定化しようとする「合界を再定義しようとする全般的努力に伴う」ものであったのは間違っニティーの内的結合力を再確認し、植民者と被植民者との間の境に、一九世紀における性に対する態度の変化が「ヨーロッパ人コミに、一九世紀における性に対する態度の変化が「ヨーロッパ人コミム領インドシナの文脈でA・L・ストーラーが指摘しているよう

し、一八世紀に現地人の情婦や妻をもつことが奨励されたときにも、 と思われる。 と思われる。 と思われる。

ないかというイギリス人たちの想像力を代弁していたと言えるだろないかというイギリス人たちの想像力を代弁していたと言えるだろいかというイギリス人たちの想像力を代弁していたと言えるだろいかでインド人女性がとりあげられるとき、彼女たちは常に、見境もなく愛する人に身を捧げる「情熱的」で「官能的」な、そし見境もなく愛する人に身を捧げる「情熱的」で「官能的」な、そした性性」に対しても向けられたものであった。例えば一九〇九年にモー性性」に対しても向けられたものであった。例えば一九〇九年にモード・ダイバーが既婚女性の婦人室「ゼナーナ」を描写して「そこでは苦痛と苦悶に横たわったインド女性が、迷信に看護され、呪文とは苦痛と苦悶に横たわったインド女性が、迷信に看護され、呪文とは苦痛と苦悶に横たわったインド女性が、迷信に看護され、呪文とは苦痛と苦悶に横たわったインド女性が、迷信に看護され、呪文とは苦痛と苦悶は横たわったインドの神秘的な力が保持されているのではされた女性的な領域でインドの神秘的な力が保持されているのではされた女性的な領域でインドの神秘的な力が保持されているのではされた女性的な領域でインドの神秘的な力が保持されているのではないかというが見がでいるように、一九世紀後期以降の作り、といかというには、大きないのでは、大きないかというには、大きないかというには、大きないかというには、大きないかというないかというには、大きないかというには、大きないかというないが、大きないかというないが、大きないかというないが、大きないかというないが、大きないかというには、大きないかというないが、大きないかというないかというないが、大きないかというないが、大きないかというないが、大きないが、大きないかというないが、大きないかというないが、大きないが、大きないかというないが、大きないかというないが、

ものであった。 ものであった。 「男性性」を征服していくカーリー的魔力によって特徴づけられるであったことにも反映されている。彼らにとって「インド性」とは誘惑、堕落、暴力、死などと結びつけられた移り気の女神カーリー誘惑、堕落、暴力、死などと結びつけられた移り気の女神カーリーう。こうした傾向はまた、ヒンドゥー教の神々のなかでイギリス人う。こうした傾向はまた、ヒンドゥー教の神々のなかでイギリス人

避されていったことと背後で結びついていたに違いない。 避されていったことと背後で結びついていたに違いない。 避されていったことと背後で結びついていたに違いない。 を奪い取ろうとする主人公ターヴィンは、女王の魔法と性的誘 を奪い取ろうとする主人公ターヴィンは、女王の魔法と性的誘 を奪い取ろうとする主人公ターヴィンは、女王の魔法と性的誘 に受したキプリングのプロットが、一九世紀中頃以降支配的になっ は何物も恐れない」彼の「男性性」は暗闇で去勢されるのを免れる。 にうしたキプリングのプロットが、一九世紀中頃以降支配的になっ は何物も恐れない」である。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上で は何物も恐れない」である。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上で は何物も恐れない」である。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上で は何物も恐れない」である。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上で は何物も恐れない」である。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上で は何物も恐れない」である。 とがこれていったことと背後で結びついていたに違いない。

いうまでもない。異人種間の「不純異性行為」を摘発する多くの「社た彼女たちが、インド人女性に対する性的ライバルであったことはた。「若い乙女を積んだ貨物船」に乗りこんで夫を求めにやってき頃以降急速にその数を増やしていったイギリス人女性の存在であっていったことにもっと直接的な形で影響を与えたのは、一九世紀中てかったことにもっと直接的な形で影響を与えたのは、一九世紀中しかし、インド人妻や情婦が英領インドの白人社会から姿を消し

視して語ることはできない。 ではかれていた位置 ――「純粋培養のイギリス文化」の担い手 ―― を無は女性たちだった」とまで表現している。しかし、度々指摘されるは女性たちだった」とまで表現している。しかし、度々指摘されるに自分たちの優位性を主張し、その態度が最も露骨で残忍だったのに自分たちの排他的で不寛容な態度を、彼女たちが植民地インドで置かれていた位置 ―― 「純粋培養のイギリス文化」の担い手 ―― を無視して語ることはできない。

9 医療と「文化的健康状態」

マ・S・ナイポールの「傷ついた文明」というとらえ方にも生き 大学では、「病い」のレトリックは「治癒されるべき」イ がているように、「病い」のレトリックは「治癒されるべき」イ をどまらない極めて現実的な問題であった。一九一三年にインド医 をとまらない極めて現実的な問題であった。一九一三年にインド医 をとまらない極めて現実的な問題であった。一九一三年にインド医 をがまらない極めて現実的な問題であった。一九一三年にインド医 をがまらない極めて現実的な問題であった。 「責務」をはたす活力を維持しなければならなかった彼らの不安が ストレートに表現されていた。

断などの配慮のもとに決定された。言うまでもなくこのような理論のた。マラリアが語源的に「悪い空気」を意味したように多くの病気は「発酵性」のものと考えられ、発酵の原因となる「環境」にはこうした理論はイギリス人の生活空間の設計に重大な影響を与えている。例えば兵営や住居は、インド人街や彼らの農耕地から離れたいる。例えば兵営や住居は、インド人街や彼らの農耕地から離れたいる。例えば兵営や住居は、インド人街や彼らの農耕地から離れたいると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮あると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮あると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮あると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮あると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮あると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮めると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮めると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮めると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮めによっている。

ドゥー聖地であると報告したベンガル衛生局長であった。ドゥー聖地であると報告したベンガル衛生局長であった。ヒンンド的環境」に対する道徳=文化的非難をも滑りこませることになる。一八六八年に「プーリーの偶像崇拝のぞっとするような退廃とる。一八六八年に「プーリーの偶像崇拝のぞっとするような退廃とおびつくときほど、人間の精神が破滅的になることはめったにない」と断言したのは宣教師でも熱狂的な改革主義者でもなく、綿密い」と断言したのは宣教師でも熱狂的な改革主義者でもなく、綿密い。と断言したのは宣教師でも熱狂的な改革主義者であった。

イギリス人たちの心をとらえた事実に最も明らかである。 ・川、沼地から立ちのぼる毒気に病源を求めるギリシア以来の環境 ・大脈で積極的に維持され、再生産されていたものであった。そのこ とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九 とは、熱帯のもとに唱えられ、二○世紀も半ばになる頃まで強力に植民地の オギリス人たちの心をとらえた事実に最も明らかである。

く、紫外線などの化学線に有害性が帰せられたこと、第二に、化学での議論と異なっていた。第一に、発酵を助長する太陽熱にではなの議論の影響を受けたものであったが、それは以下の三点でそれま与える諸影響』を著した米領フィリピンのL・E・ウッダラフ博士新たな太陽光線有害論は一九〇五年に『熱帯の太陽光線が白人に

化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。 化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。 化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。 化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。 化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。 化」に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。

国立公園の設立によって「暗黒なる力」そのものを再生産させなけると思われるのは、この新しい環境病因論がイギリス人たちの「衰弱」を避けられない事実として確定したことであった。そしてそれはおそらく、責務を果たす立場にいることの名誉を賛美しながらも、たの遂行が常に苦難と見なされなければならなかった「白人の責務」の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」ことは責務の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」ことは責務の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」ことは責務の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」ことは責務の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」というにということ以上に重要であると思われるのは、この新しい環境病因論がイギリス人たちの「衰弱の暗黒なる力」を征服する力を見せつけるためには、動物保護やしてしまうというパラドックスがそこにはある。ハンティングで「外方で、「衰弱の設立によって「暗黒なる力」そのものを再生産させなけると思われるのは、このが高いない。

く、両者の間に明確な境界線を設け、後者に負の価値をおわせた点原菌の前にイギリス人もインド人も平等な立場に立たせるのではな前の環境病因論一般の延長線上に位置づけられるものであった。病取っていたものの、それが社会・文化的に持っていた意味はそれ以

二〇世紀初頭の太陽光線有害論は、「医学的」には新たな表現を

しようとする試みであったと言うことができるであろう。ち断ち切ろうとする病原菌理論から、「外界の暗黒なる力」を救済その意味でこの新たな環境病因論は、「衰弱の恐怖」をその根源かにはその「恐怖」の存在自体が医学的に保証される必要があった。ればならなかったのと全く同じように、「衰弱の恐怖」と戦うためればならなかったのと全く同じように、「衰弱の恐怖」と戦うため

こうした視点からは、熱帯の環境からイギリス人を守るために医学的に奨励されたあらゆる事柄、例えばトピと呼ばれた植民地特有の日よけ帽をかぶることや、紫外線から脊髄を守ると考えられたスパイン・パッドを身に付けること、パンガローの回りに樹木を植え月陰を作ることや、定年制を施行し「純血種」のイギリス人を輸入し続けるといったことなどのすべてが、同時にイギリス人を輸入し続けるといったことなどのすべてが、同時にイギリス人を輸入に定められた手続きを重んじながらとり行われたにちがいない。「責に対して表れた手続きを重んじながらとり行われたにちがいない。「責に対して表れた手続きを重んじながらとり行われたにちがいない。「責に対して表れた。 を果たし終え、本国へ向かう汽船に乗りこんだイギリス人を輸入と同様、「獲物=病気」を駆逐し尽くす効率性よりもむしろ、厳格と同様、「獲物=病気」を駆逐し尽くす効率性よりもむしろ、厳格と同様、「獲物=病気」を駆逐し尽くす効率性よりもむしろ、厳格と同様、「獲物=病気」を駆逐し尽くす効率性よりもむしろ、厳格に定められた手続きを重んじながらとり行われたにちがいない。「責務」を果たし終え、本国へ向かう汽船に乗りこんだイギリス人を守るために医が、船腹が港を離れるや否や炎天下一斉にトピを海に投げ入れた姿が、船腹が港を離れるや否や炎天下一斉にトピを海に投げ入れた姿が、船腹が港を離れるや否や炎天下一斉にトピを海に投げ入れた姿が、船腹が港を離れるや石や炎天下一斉にトピを海に投げ入れた姿が、船腹が下が、船腹が大きがある。

78

ころがなかったのである。
てもっていた「危険性」や「順応不可能性」の点でなんら変わるとイズムと同様インド人を育む環境であり、それがイギリス人に対しと同じ想像力に支えられていた。インドの気候環境は、ヒンドゥーで、それは一八三○年代にコレラとヒンドゥー聖地を結びつけたので、それは一八三○年代にコレラとヒンドゥー聖地を結びつけたの

は、はからずも、環境病因論の純粋に「医学的」な意味内容よりも らず「健康な」環境として半ば熱狂的に崇拝されていた。そのこと 方が逆に紫外線が強いという事実はあまり気に止められず、相変わ 止めらけるようになった後も、平地に比べてヒル・ステーションの たのである。二〇世紀に入って新たな太陽光線有害論が一般に受け の英国人を育て上げることのできる」極めて「英国的」な環境だっ 環境は同時に、「習慣、体型、精神的活力などあらゆる面で、生粋 的環境を提供するものであった。ヒル・ステーションの「健康な」 ではなく、イギリス人としてのアイデンティティーを確認する文化 に、ヒル・ステーションは単に涼しく健康な環境を提供したばかり ど重要な役割を果たしたものはなかった。しかし先にも触れたよう として始まったのであり、その位置の決定や年に少なくとも一度と ル・ステーションに移住する習慣を正当化するのに、医学的配慮ほ ェルの指摘するように、ヒル・ステーションは何よりも健康保養地 康状態」がイギリス文化と重ねあわされる傾向があったことをヒル 「文化的」意味内容の方がはるかに重要であったことを間接的に示 ステーションほど明確に示してくれるものはない。ノラ・ミッチ コレラがヒンドゥーイズムと結びつけられたのと同じように、「健

単に言葉の響きの類似以上の強い結び付きをもっていたのである。tion(気候順化)と Acculturation(文化変容)とは、植民地の文脈で、であった。そしてともに「禁じられた」事項であった Acclimatiza-健康状態」というよりもむしろ「文化の純血性=文化的健康状態」しているように思われる。つまり問題となっていたのは、「肉体的しているように思われる。つまり問題となっていたのは、「肉体的

3 結びにかえて

「病い」と対比されることになったのである。「病い」と対比されることになったの「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱人たちが書物のなかに定着されないのでなく、植民地のイギリス人たちの「強強されねばならない「生きた現実」であった。イギリス人たちの「強強される」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」とで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」というである。

りに熱狂した彼らの姿をとらえることはできない。本小論で扱ったが狂いそうに」なりインド女性の魔性に脅え、「健康な」環境づくであろう。彼らの入念な演技を政治の「道具」にやせ細らせてしまに基づいた利益極大化の行動であったなどと結論づけてはならないしかし「演じられた」ものだからといって、それが合理的な計算しかし「演じられた」ものだからといって、それが合理的な計算

スポーツ、性、医療をめぐる彼らの活動は、明らかにイギリス人と とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものである。 スポーツ、性、医療をめぐる彼らの活動は、明らかにイギリス人と とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものである。 とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった とき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも敷くものであった

の乏しい彼らは、異国の地で、誰に命令されるまでもなく「自分がの乏しい彼らは、異国の地で、誰に命令されるまでもなく「自分がいていた力の性質を理解することはできないであろう。植民地状況で働いていた力の性質を理解することはできないであろう。植民地状況に働いていた力の性質を理解することはできないであろう。植民地状況で人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C人々に集合的に支えられるまでもなく「自分がの乏しい彼らは、異国の地で、誰に命令されるまでもなく「自分がの乏しい彼らは、異国の地で、誰に命令されるまでもなく「自分がいたのとにない。」と表現における方にない。

力に似たものであったはずである。

一方に似たものであったはずである。

一方に似たものであったはずである。

一方に似たものというよりもむしろ、J・ドーストが「オーン状況における文化の力、すなわち、文化が自分自身についてのイン状況における文化の力、すなわち、文化が自分自身についてのイン状況における文化の力、すなわち、文化が自分自身に対した力は、法する「説明」を生産していたのだった。それが生み出した力は、法する「説明」を生産していたのだった。それが生み出した力は、法する「説明」を生産していたのだった。それが生み出した力は、法する「説明」を生産していたのだった。それが生み出した力は、法する「説明」を生産していたのだった。

ことによって可能となるものであった。英語教育を受け、言葉ばか

えるだろう。 りでなく趣向や思考方法においてもイギリス流を取り入れた彼ら ことができなかった彼らの支配の終焉を予告するものであったと言 考えられた ―― を「接ぎ木」した建築物が建てられたとき、それは のインドばかりか、カイロやダマスカスのサラセン様式を経て、ビ 様式にインド的建築様式の最も「純粋な」要素 ―― それはアクバル り越えイギリス人の地位を侵食しようとする危険な存在だったので ぼりつめようとしていたが、イギリス人にとって彼らは「本物のイ は、歴史の流れのなかで文字通り現実のインドを代表する地位にの ザンツ様式や古代ローマ様式にまで遡ることのできる要素であると デリーへの遷都が決定され(一九一一年)、そこで西洋古典建築の ある。彼らのナショナリズム運動から逃れるためにカルカッタから ンド人」の姿から逸脱した奇妙な「融合物」であり、「境界」を乗 「純粋性」の殻のなかに閉じこもってインドの現実の姿を見定める

- (1)本小論文は一九九二年一月に提出された修士論文『植民地下インド の「英国」文化』のダイジェスト版である。枚数の制約上論拠となる に記した文献および修士論文を直接参照して頂ければ幸いである。 かなりの事例を省かざるを得なかった。不明確な点については以下注
- (2) 例えば、Gough, K. "New Proposals For Anthropologist" in Curthropology & Colonial Encounter. London, Ithaca Pr, 1973; ルクレー rent Anthropology, 9, 5, pp.403-406, 1968; Asad, T.(ed.), An ル、G.『人類学と植民地主義』平凡社、一九七六など。

(3) サイード、E.『オリエンタリズム』平凡社、一九八六。

- (4) Rosaldo, R. Culture and Truth, Beacon Pr., 1989, pp.68-87
- (5) Stoler, A.L. "Rethinking Colonial Categories" in Comparative らこれまでの植民地社会研究を批判的に検討している。特に pp.134-Studies of Culture and History, 1989(a), pp.134-161. は同様の視点か 135 にあげられた文献は重要であろう。
- (Φ) Mannoni, O. Prospero and Caliban: The Psychology of Colonization Wurgaft, L. The Imperial Imagination: Magic and Myth in Kipling's In tran. by. P. Powesland, Univ. of Michigan Pr., 1990 (Fr. ed. 1950); dia. Wesleyan Univ. Pr., 1983.
- (7)ファノン、F.『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房、一九八四(原 Univ Pr., 1983 がある。 書 一九五二)六四-七六頁。なおファノンの議論を批判的に検討し たものとして Mcclouch, J. Black Soul and White Artifact, Cambridge
- (∞) Diamond, S. In Search of the Primitive, Dutton, 1974
- (\circ) Clifford, J. Predicament of Culture, Harvard Univ. Pr., 1988, p.272 (1) Stoler, op.cit. ねよい Stoler, A.L. "Making Empire Respectable: the Cultures" in American Ethnologist, 16, 4, 1989(b), pp.634-660. Politics of Race and Sexual Morality in 20th-Century Colonia
- (□) cit. in Hutchins, F. The Illusion of Permanence: British Imperialism in India, Princeton Univ. Pr., 1967, pp.41-2
- (13) 詳しくは、Hutchins, *op.cit.*, pp.20-52 Stokes, E. The English Utilitarians in India, Oxford Univ. Pr., 1959

(12)詳しくは、Hutchins, *op.cit.*, pp.3–19. また特に功利主義については

- (4) cited in *ibid.*, p.20.
- (5) cit., in Hutchins, op.cit., pp.26-27
- (16)アーレント、H.『全体主義の起源2』みすず書房、一九九○(原 書一九五一)一四一頁。
- (\(\sigma\)) ibid., pp.141-142.
- (18)Hutchins, op.cit. の言葉 "A Middle Class Aristocracy" を訳したも

- う言葉が使われている。 の。また Wurgaft, L. op.cit. では即席貴族 "Instant Aristocrat" といの。
- (空) Spangenberg, B. "The Problem of Recruitment for the Indian Civi: Service During the Late Nineteenth Century", in J. of Asian Studies XXX, 1971, pp.346-360. によれば、特にインド高等文官の場合はその九○%が中産階級出身だった。
- (\times) ibid., pp.353-355.
- (云) Arnold, D. "White Colonization and Labour in Nineteenth-Century India" in *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, 11, 2, 1983, pp.133-158.
- (\mathref{M}) Arnold, D. "European Orphants and Vagrants in India in The Nineteenth Century" in *The Joural of Imperial and Commonwealth History*, 7, 2, 1979, pp.104–127.
- (3) Kincaid, D. *British Social Life in India. 1608-1937*, George Routlege & Sons, Ltd, 1983, pp.83-137. はナバブたちの生活を詳細に描写している。
- (24) Bailey, F.S. Women and The British Empire, *Library of Congress* Cataloging in Pablication Data, 1983. はこの分野に関する詳細な文献
- (5) *ibid.*, p.32.
- (26) cit. in *ibid.*, p.34.
- (27) *ibid*.
- (≈) cit. in Wurgaft op.cit., p.42.
- (29) ヒル・ステーションに関して詳しくは、Spencer, J.E. 1948. "The Hill Stations and Summer Resorts of the Orient" Geological Review, 38:4, 1948, pp.637-51; King, A.D. Colonial Urban Development, Routlege & Kegan Paul, 1976, pp.156-179; Hutchins, op.cit., pp.104-106; Wurgaft op.cit., p.43; Allen, C. Plain Tales from the Raj, Futura, 1991(1975), pp.152-161. を参照のこと。

- ・ステーション。 (30)cit. in., King p.165. なお、オータカムンドはマイソール近くのヒル
- (31) Royal Commissionon the Sanitary State of the Army in India, cit. in ibid. ソナワールはシムラ近くのヒル・ステーション。
- (32)彼らのスポーツへの熱狂ぶりは例えば Allen, C. op.cit., 1991(1975), pp.129-140; Macmunn, Sir G. The Living India, Neeraj Publishing House, 1980(1930). などから伺い知ることができる。また彼らがのめり込んだのが「英国的」スポーツであったことは、一八世紀のナバブたちがインド「土着の」娯楽のパトロンとなっていたことと極めて対照的である。ナバブたちの娯楽については、Spear, P. The Nabobs, Oxford Univ. Pr., 1963. を参照のこと。なお、英領植民地におけるスポーツと文化覇権の問題に関する包括的かつ理論的な検討を試みたものとして Stoddart, B. "Sport, Cultural Imperialism, and Colonial Response in the British Empire" in Comparative Study of Society and History, 1988, pp.649-673. がある。
- (3) Bell, H. Foreign Colonial Administration in the Far East, 1928, cit. in 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治』中公新書、一九九一、一四八頁(34) cit. in 浜渦, p.146.
- (35) cit. in Rosslli, J. "The Self Image of Effeteness: Physical Education and Nationalism in Nineteenth-Century Bengal" in Past and Present, 86, 1980, pp.122. なおこの論文は、初期のナショナリストたちが自らの文明の「衰退」を肉体的観点から考えていたことや、ナショナリズムが体育活動の推進と歩調を合わせて進められたことや、ナショナリズムが体育活動の推進と歩調を合わせて進められたことなどを論じるものであり、本小論の趣旨との関連からも大変興味深い。また、「男性のこのとして、以下のものがある。Nandy, Ashis, The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism, Delhi, Oxford Univ. Pr., 1092
- (%) cit. in, Stoddart, op.cit., p.658

- (37) cit. in, Mackenzie, J.M. The Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Empire, Manchester, Manchester Univ. Pr., 1988, p.189. なお、英領インドを含む英国植民地のハンティングに関しては他に、Mackenzie, J.M. "The Imperial Pioneer and Hunter and the British Masculine Stereotype in Late Victorian and Edwardian Times" in Manliness and Morality, ed. by J.A. Mangan, Manchester Univ. Pr., 1987.
- (38) Sir Bartle Frere の発言。出展は不明。cit. in ibid., p.194
- (A) Woody, J.G., My Sporting Memories, 1923, cit. in ibid., p.193.
- (\(\pi\)) Mackenzie, 1987, op.cit., p.184.
- (五) Mackenzie, 1988, op.cit., Chap.8-11, esp., 186-188.
- 九四〇 平凡社、一九七〇。(42) オーウェル著作集Ⅰ、一九二〇-一
- (4) オーウェル『ビルマの日々』彩流社、一九八八。
- (\(\frac{1}{4}\)) Hutchins, op.cit., p.24.
- (45) Ballhatchet, K. 1980. Race, Sex, and Class Under the Raj, St. Martin's Press, 1980. Chap.6. なお、英国人兵士の性に対するコントロールは、以下で論じるのとは異なる原則に基づいて行われていた。彼らは兵営内で娼婦を禁じられている。性病が単に生物学的現象でなかったことは想像に難くない。くわしくは修論七四-一〇八頁およびたことは想像に難くない。くわしくは修論七四-一〇八頁およびBallhatchet, op.cit., chap.1-3. を参照のこと。
- (4) Stoler, 1989(b), op, cit., p.651.
- (4) Hyam, R. Empire and Sexuality, Manchester Univ. Pr., 1990, pp.115-121.
- (4) cit. in Ballhatchet, op.cit., p.150.
- (\$\pi\$) Greenberber, A.J. The British Image of India, Oxford Univ. Pr., 1969.
- (S) cit. in Wurgaft, op.cit., p.31

- (51) *ibid*.
- (S) Kipling, Rudyard, 1913, "The Naulahka" in The Bombay Edition of Rudyard Kipling in Prose and Verse. cit. in Wurgaft ibid., p.389.
- (器) Ballhatchet, op.cit., esp. chap.5, 6.
- (5) cit. in Showalter, E. "A Passage to India as 'Marriage Fiction':
 Forster's Sexual Politics" in Women & Literature, 5, 2, 1977, p.5.
- (5) cit. in Bailey op.cit., p.10.
- (56) 先にあげた Stoler の他に、Gartrell, B. "Colonial Wives: Villains or Victims?" in *The Incorporated Wife* ed. by Shirley Ardener, Croom Helm 1984, pp.165–185. が英領ウガンダの文脈で、同書のBrownfoot, Janice "Memsahibs in Colonial Malaya: A Study of Euro-
- 一九七八。 (57) ナイポール、V・S.『インド —— 傷ついた文明』岩波現代選書、pp.186-210. が英領マレーシアの文脈で同趣旨の議論をしている。

pean Wives in a British Colony and Protectorate, 1900-1940'

- (8) インドで流行した病気に関する概説的説明は、Mitchell, N. The Indian Hill-Station: Kodaikanal. Univ. of Chicago, 1972, pp.13-56. 病気や死の恐怖に関するイギリス人たち自身の言葉は、Allen, C. Plain Tales from the Raj, Futura, 1991(1975); Brown, H. The Sahibs: The Life and Way's of the British in India as Recorded by Themselves, William Hodge & Company Limited, 1948, pp.37-49. に見出される。(59) cit. in Kennedy, D. 1990, "The perils of the midday sun: climatic anxieties in the colonial tropics" in Imperialism and Natural World ed. by J.M. Mackenzie, Manchester Univ. Pr., 1990, p.103.
- pp.108-115. などによった。 pp.108-115. などによった。
- (61) 特に、King, op.cit., pp.109-114, 123-156.
- "Cholera and Colonialism in British India" in *Past and Present*, 113,

細菌学の視野から判断してはならないであろう。 無菌学の視野から当断してはならないであろう。 はたという。なお、コレラ流行と聖地巡礼との間には現代の細菌学の は野からは明確な因果関係をたどることができる。しかし、腹部を冷 したという。なお、コレラ流行と聖地巡礼との間には現代の細菌学の したという。なお、コレラ流行と聖地巡礼との間には現代の細菌学の したという。なお、コレラ流行と聖地巡礼との間には現代の細菌学の は野からは明確な因果関係をたどることができる。 しかし、腹部を冷 は野からは明確な因果関係をたどることができる。 しかし、腹部を冷 は野からは明確な因果関係をたどることができる。 しかし、腹部を冷 したという。彼によればコレラは

- (3) Mitchell, op.cit., pp.15–19.
- (4) ウッダラフの太陽光線有害論については、Kennedy, op.cit. を参照した。熱帯の日光に対する恐れの起源と歴史的変遷、日よけ帽トピの発達については Renbourn, E.T. "The Life and Death of Solar Topi: A Chapter in the History of Sunstroke" in Journal of Tropical Medicine and Hygiene, 65, 1962, pp.203-218. に詳しい。
- (5) Kennedy op.cit., p.124
- (6) *ibid.*
- (67) Renbourn, op.cit. を参照。
- 知るための豊富な資料を提供している。 知るための豊富な資料を提供している。 知るための豊富な資料を提供している。
- 6) ivia.
- (n) 新たに植民地に赴任するものが単に「生物学的」に「純血」である(n) 新たに植民地に赴任するものが単に「生物学的」に「純血」であるものであり、植民者たちの自己イメージと密接に関連したものであ 植民地行政官になるために彼らに課せられた教育がいかなるものであ 植民地行政官になるために彼らに課せられた教育がいかなるものであ がりでなく「文化的」にも「純血」でなければならなかったことは、
 「のたという視点は、サイード、E op.cit., p.42. が示している。
- (刀) ibid., p.140. および Allen, 1991, op.cit., pp.255-264 を参照

- (2) Mitchell, op.cit., pp.13-56
- (73) 注(31) 参照。
- (74)「道具主義的」議論を代表するものとして、例えばエスニシティーと境界維持について論じた Barth, F. Ethnic Groups and Boundaries,
- 極めて説得力のあるやり方で実際の文化分析に適用してみせた。書房(特に八二!一〇五頁)に簡潔に整理されている。また彼は、書房(特に八二!一〇五頁)に簡潔に整理されている。また彼は、でtrans. by Richard Price), Harvard Univ. Pr., 1984. で自らの理論を(trans. by Richard Price), Harvard Univ. Pr., 1984. で自らの理論を
- 五-1八六頁を参照。 「中心=創始的主体」を求める権力論を強く批判している。特に一八(76)フーコー、M.『知の考古学』河出書房新社、一九八一は、権力に
- (77) ギャーツ、C.『文化の解釈学2』岩波現代選書、一九八七、四三五-一八六頁を参照。
- 八頁。 八頁。 Onst, J.D. The Written Suburs: An American Site, An Ethnographic
- Dilemma, Univ. of Pennsylvania Pr. 1989, pp.1-4.

 (2) Wurgaft, op.cit., pp.11-16, 39, 80, 132.; Greenberber, A.J. The British Image of India: A Study in Literature of Imberialism 1880-
- Wurgan, op.an., pp.11-16, 39, 60, 132.; Greenberber, A.J. 1ne British Image of India; A Study in Literature of Imperialism 1880– 1960. London, Oxford Univ. Pr., 1969, pp.35-7, 44-5, 78-9, 108-9, 111, 134, 141-2 ないを参照のロシ。
- (8) Wurgaft, op.cit., pp.32-41, 47-49, 79-100; Greenberger, op.cit., pp.37-8, 96-8; Allen, C. 1991, op.cit., pp.197-208. などを参照のこと。(31) 一八七七年の「皇帝会合」に関しては、人類学的な立場から Cohn, B.S. "Representing Authorty in Victorian India", in *The Invention of Tradition*, E. Hobsbawm and T. Ranger eds., Cambridge Univ. Pr, 1983, pp.165-210. が詳しく論じている。
- たちの軽蔑や否定的イメージを、植民地時代のインドについて論じた(82) バブー (Babu) と呼ばれたら彼らに対して向けられたイギリス人

(3) Metcalf, T.R. An Imperial Vision: Indian Architecture and Britain's pp.53-79; Wurgaft, op.cit., pp.39-41, 47, 150-51, 166-68 డ్రస్తు op.cit., pp.49-51, 64, 71-73, 106, 130, 144, 188; Hutchins, op.cit., 書物から捜し当てるのは極めて容易である。例えば、Greenberger

己イメージの変遷を読み取ろうと試みている。 共建造物の建築様式の変遷を分析し、そこから支配者イギリス人の自 Raj, Univ. of California Pr., 1989, pp.211-39, esp. pp.222-23. を参照。 本書は極めて鋭敏な眼差しで一九世紀から二〇世紀までのインドの公